

になった（少しお世辞も加えます）、ということ
を伝えると、とても喜んでくれて、父親であるジョ
ンのCDブックレットにサインをしてくれました。
さらにジョンの名曲“ Boom Boom ”をいっしょ
に唄ってくれた時には、爆発してしまいそうなく
らい嬉しかったです。最後には、テーブルまで来
て唄ってくれ、いっしょに写真を撮ってくれまし
た（写真8）。



写真8 ザキヤフッカーと

このようにサンフランシスコは、僕の尊敬する
人たちがいた場所であり、僕にとっては特別な場
所と言えます。特にヘイトアシュベリー地区は心
落ち着きます。この街は治安的にも悪くなく（も
ちろん悪い地区もある）、十分に気を付けてさえ
いれば怖い目に遭うことはほとんどないと思いま
す。皆さんも自由を感じなくなった時には、ぜひ
サンフランシスコへ行ってください。

蝙蝠を食べる勇氣はありま すか？

経営学部

矢田 博士

一、はじめに

前号に引き続き蝙蝠の話をしてみたい。前号で
は、蝙蝠を主題とした中国古典詩歌においては、
蝙蝠はおおむね嫌悪の対象として詠われていたこ
と、その一方で、今日の中国においては、蝙蝠の
「蝠」が「福」と同じ音であることから、めでた
い生き物とされていること、そして蝙蝠をめあた
いものとする発想は、目下のところ明代の頃まで
さかのぼって確認することができ、陶器などの模
様にもしばしば吉祥文として画かれること⁽¹⁾など
について紹介した。

中国古典詩歌においては、おおむね嫌悪の対象
とされていた蝙蝠ではあるが、前号でも紹介した
白居易の「洞中蝙蝠」詩の冒頭の句にも、「千年
鼠化白蝙蝠《千年を生きた鼠が白い蝙蝠に変化す
る》」と詠われているように、蝙蝠には「長寿の
生き物」という側面もあった。今号では、その
「長寿」という側面に焦点をあてて論じてみたい。

二、蝙蝠を食べると長寿が得られるのか

先の白居易の詩にも詠われているように、中国
では古来、蝙蝠は長寿の生き物とされていたよう
である。例えば、『太平御覧』巻九一一「獸部二
三・鼠」に引く鄭氏の『玄中記』には、

百歳之鼠、化爲蝙蝠。

《百歳の鼠が、変化して蝙蝠となる。》

とあり、梁・任昉の『述異記』巻下に引く『仙經』には、以下のようにある。

蝙蝠、一名仙鼠。千歳之後、體白如銀、棲即倒懸。

《蝙蝠は、またの名を仙鼠ともいう。千年の後、身体が銀のように白くなり、ねぐらにつけばすぐさま逆さまにぶら下がる。》

白居易の詩の「千年鼠化白蝙蝠 [千年の鼠は白き蝙蝠と化す]」という句は、以上の二つの言い伝えを組み合わせた表現と見てよい。

このように蝙蝠は長寿の生き物とされていたことから、さらにそれを食べると仙人のように不老長寿を得ることができるとも考えられたようである。西晋・崔豹の『古今註』に以下のように言う。

蝙蝠、一名仙鼠、一名飛鼠。五百歳則色白而腦重。集物則頭垂。故謂倒挂蝙蝠。食之成仙。

《蝙蝠は、またの名を仙鼠とも、飛鼠ともいう。五百歳になると色が白くなり脳が重くなる。物に止まると頭を下にしてぶらさがる。それゆえ倒挂蝙蝠という。これを食べると仙人になれる。》

また、東晋・葛洪の『抱朴子』内編卷十一「仙薬」にもまた、以下のように言う。

萬歳蟾蜍、頭上有角、額下有丹書八字體再重、……千歳蝙蝠、色白如雪、集則倒懸。腦重故也。此二物得而陰乾、未服之、令人壽四萬歳。

《一万歳の蟾蜍は、頭の上には角があり、^{ひきがえる}額の^{あご}下には八の字が二つ重なったような赤い模様があり、……千歳の蝙蝠は、色が雪のように白く、止まれば逆さまにぶら下がる。それは脳が重いからだ。これら二つの物を手に入れて日陰で干し、粉末にして服用すれば、人の寿命を四万歳にすることができる。》

蝙蝠を食べるとはたして本当に長寿が得られるのか、という点については、にわかに信じることはできないが、何らかの薬用効果はあったと言われれば、幾分かは信憑性も帯びてくるのではないだろうか。蝙蝠の薬用効果について、例えば唐・慎微の『重修政和證類本草』巻十九には、以下のように言う。

伏翼、味鹹平無毒。主目瞑痒痛療淋、利水道明目、夜視有精光。久服令人熹樂、媚好無憂。一名蝙蝠、生太山川谷及人家屋間。立夏後、採陰乾。

《伏翼は、薄い塩味で毒はない。目の見えにくさや痛みを伴うかゆみの改善および淋病の治療などによく用いられ、体液の流れや視力回復に効き目があり、夜でも物がはっきり見えるようになる。長期に服用すれば人を陽気にさせ、愉快にし憂いのない状態に導く。またの名を蝙蝠といい、深い山中の川や谷および家屋のすきまなどに生息する。立夏を過ぎた頃、つかまえて日陰で干す。》⁽²⁾

三、蝙蝠を食べてはみたけれど

さて、食べると長寿を得ることができると言われる蝙蝠を、実際に食べてみた人がいたようである。北宋・李石の『續博物志』巻六に、北宋の劉亮と唐の陳子真という人の例を挙げて、以下のように言う。

宋劉亮、合仙丹須白蟾蜍白蝙蝠。得而服之、立死。唐人陳子真、得蝙蝠大如鴉。食之、一夕大瀉而死。

《北宋の劉亮という人が仙薬を調合するにあたり、白い蟾蜍と白い蝙蝠を求めた。それらを手に入れ服用したところ、立ちどころに死んでしまった。唐の陳子真という人がカラスほどの大きさの蝙蝠を手に入れた。それを食べたところ、一夜のうちに大量に下痢をして死んでしまった。》

あるいは服用方法を間違えてしまったのであろうか、長寿を求めて蝙蝠を食べてはみたものの、何とも皮肉なことに、二人ともそれがもとで死んでしまったのである。

四、美食家の蘇東坡先生は蝙蝠を食べたのか

長寿を求めて蝙蝠を食べた人がいる一方で、ほかに食べるものがなく、貴重な蛋白源としてやむなく蝙蝠をたべざるをえなかった人もいたようである。北宋・蘇軾（字は子瞻、東坡居士と号す）の「聞子由瘦 [子由の瘦するを聞く]」詩の冒頭の四句に以下のように言う。

五日一見花猪肉	五日に一たび見る	花猪 の肉
十日一遇黄雞粥	十日に一たび遇う	黄雞 の粥
土人頓頓食諸芋	土人 頓頓として	諸芋 を食らい
薦以薰鼠燒蝙蝠	薦むるに薰鼠と燒蝙蝠と	を以ってす

《ブタの肉には五日に一度、トリ肉入りのお粥には十日に一度、お目にかかれるだけである。土地の人々は毎食きまって蒸したイモを主食とし、おかずと言えば、鼠の薰製と蝙蝠の姿焼き。》

この詩には、蘇軾自らが施した注があり、以下のように言う。

儋耳至難得肉食。
《儋耳では、肉食を手に入れるのが至って困難である。》

「儋耳」とは、今の海南島（海南省）を指す。蘇軾は政争に巻き込まれ、最晩年の六十二歳の時にこの地に左遷され、六十六歳で死去する前の年まで、そこで過ごした。海南島は、一九八八年に経済特区に指定されて以降、開発が進み、今日で

こそ高層ビルが林立する大都市となっているが、蘇軾の当時は漢族の姿をほとんど目にする事のない、黎族が住む中国最果ての未開の地であった。

蘇軾のこの詩は、弟の蘇轍（字は子由）が痩せたという知らせを聞いて、蘇轍に宛てて贈ったもので、自らもまた、めったに肉食にありつけない海南島で、日々の食事に苦勞をしている有り様だ、と近況を伝えたものである。

蘇軾は、今ではその号にちなみ「東坡肉」の名で知られる「豚の角煮」の調理法を賦に詠い、また自らもそれを料理したと言われる。このように美食家としても知られる蘇東坡先生。はたして土地の人々が蛋白源として食べていた鼠の薰製と蝙蝠の姿焼きとを、彼もまた口にしたのであろうか。⁽³⁾

五、おわりに

長寿の生き物とされた蝙蝠。一説に、それを食べると長寿が得られると言う。しかし、実際にそれを試みた人が立ちどころに死んでしまったという報告も一方ではある。また、流罪となった蘇軾がその死の前年までいた海南島は、当時においては中国の最果ての地で、蛋白源となる肉がなかなか手に入らず、土地の人々は鼠の薰製と蝙蝠の姿焼きなどを食べていたと言う。

ところで、六十歳を過ぎ、当時の平均寿命をとうに超えていたであろう蘇軾先生。思い切って蝙蝠を食べて、寿命を延ばそうとは考えなかったのであろうか。それとも、このような惨めな状況のまま長生きをしても仕方がない、とでも思ったのであろうか。あるいは、そのようなことは非現実的な俗説・迷信として退け、もとより考えもしなかったのであろうか。蘇軾先生の当時の胸の裡は、今となってはあれこれ想像するほかないが、それはそれとして、読者のなかには自らの長寿を願っている人もいることであろう。さて、長寿を求めて蝙蝠を食べてみる勇気が、あなたにはおありだろうか。